

2025 年度 流通科学大学
卒業後アンケート調査結果報告書

流通科学大学

2026 年8月

目 次

I. 調査概要	p.2
II. 調査結果	
1. あなた自身のことについてお聞きします	p.3
(問 1～4)	
2. あなたの現状についてお聞きします	p.4
(問 5)	
3. 本学在籍時、卒業後の教育内容に対する意識についてお聞きします …	p.5
(問 6～15)	
4. 本学の教育やサービスについての改善点や後輩へのメッセージについて	p.15
(問 16～18)	
III. 卒業生アンケート(卒業後の既卒者向けアンケート)についての総括	p.18

Ⅰ. 調査概要

1. 調査の目的

本調査は、本学における内部質保証活動の一環として、本学の提供する教育が卒業生にどのような学習成果をもたらしたのかを、点検・評価するために実施する。

2. 調査対象

卒業後3年目を迎えている学部卒業生

[2019年度入学かつ2022年度(2023年3月)卒業生]

3. 調査方法

オンライン調査(ハガキ送付、メール送信による回答依頼)

4. 調査期間

2025年12月下旬から2026年3月31日(月)

5. 回収状況

有効回答数34件

6. アンケート序文

流通科学大学では、本学が提供している教育プログラムがその目標に即しているのか、教育を受けた学生が卒業後にどのように感じているのか、教育の効果が上がっているのか等について検証し、その結果を今後の教育改善に活用すべく、卒業生の皆様の学生時代の教育に関する意識等についてアンケートを実施しております。

2025年度は、卒業後3年目を迎えられた「2019年度(2019年4月)入学・2022年度(2023年3月)卒業の方」を調査対象として実施したいと考えております。

ついては、以下の質問にご回答願います。記述式(任意回答)を含みますが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。回答に要する時間は5～10分程度です。

なお、ご回答内容は、本学のプライバシー・ポリシーに則り厳正に管理いたしますので、卒業生のみなさまの率直なお考えをお聞かせください。[ご回答〆切:2026年3月31日]

Ⅱ. 調査結果

1. あなた自身のことについてお聞きます。

問 1. あなたが卒業した学部をお選びください。

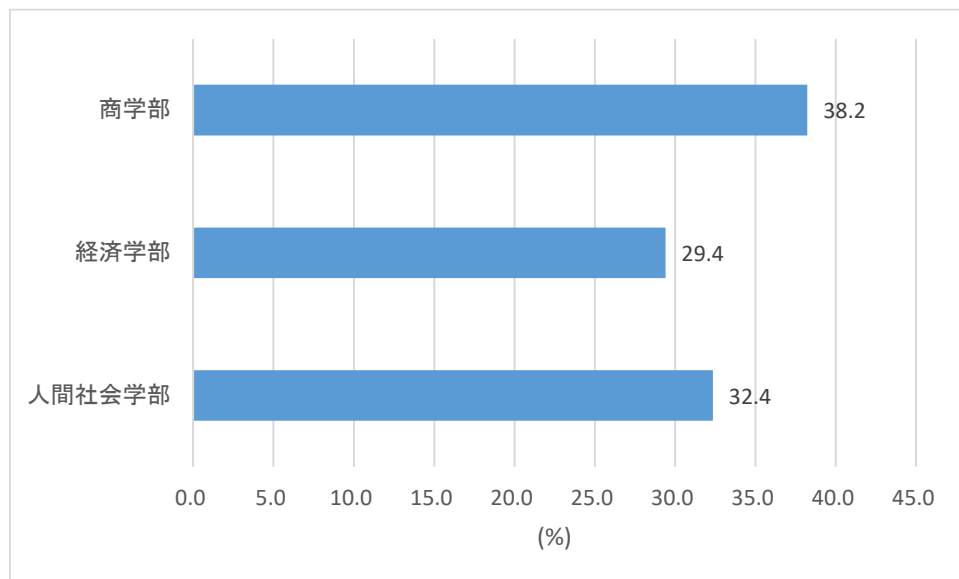


図 1. 卒業した学部

問 2. 在学時の学籍番号を教えてください。※本アンケート協力依頼の「はがき」が届いておりましたら、表面にてご確認ください。覚えておられない場合は、「不明」と明記してください。(回答者確認用)

問 3. あなたの氏名を教えてください。(在学時の姓名で教えてください。／姓と名の間には、全角スペースを入力してください。／記入例：流通 未来)(回答者確認用)

問 4. あなたの性別をお選びください。

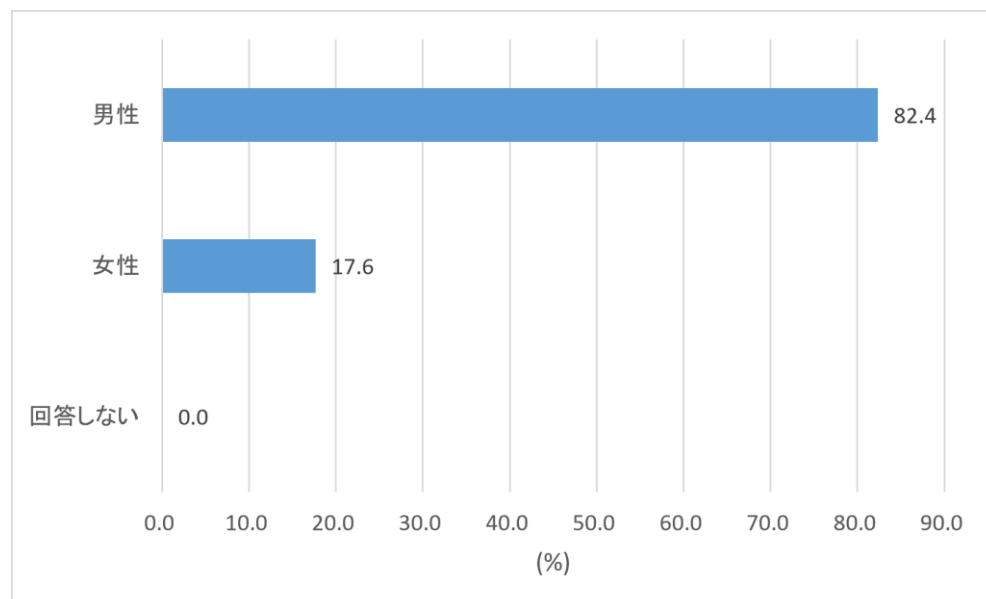


図 2. 性別

2. あなたの現状についてお聞きします。

問5. あなたの現在の進路状況等について、該当するものをお選びください(複数回答可)。

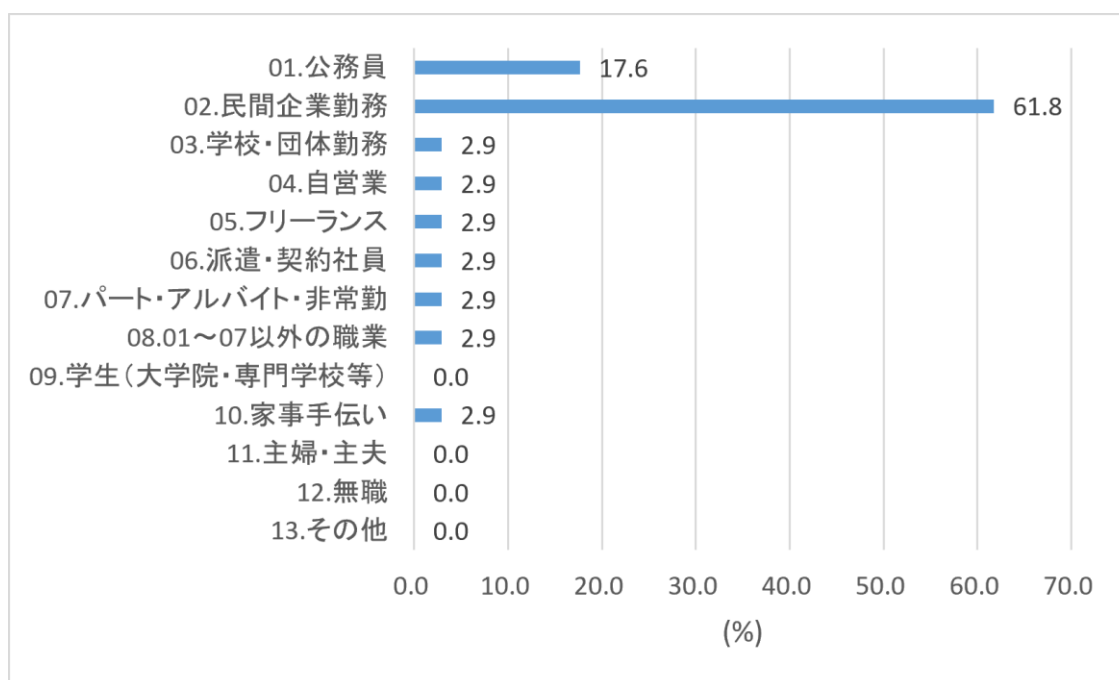


図3. 現在の進路状況等

「民間企業勤務」が61.8%と最も高く、卒業生の多くが民間企業で活躍していることが分かる。次いで「公務員」の17.6%であり、さらに「学校・団体」「自営業」「フリーランス」「派遣・契約社員」「パート・アルバイト・非常勤」「家事手伝い」が続く。

3. 本学在籍時、卒業後の教育内容に対する意識についてお聞きします。

問 6. 「自己発見とキャリア開発」について

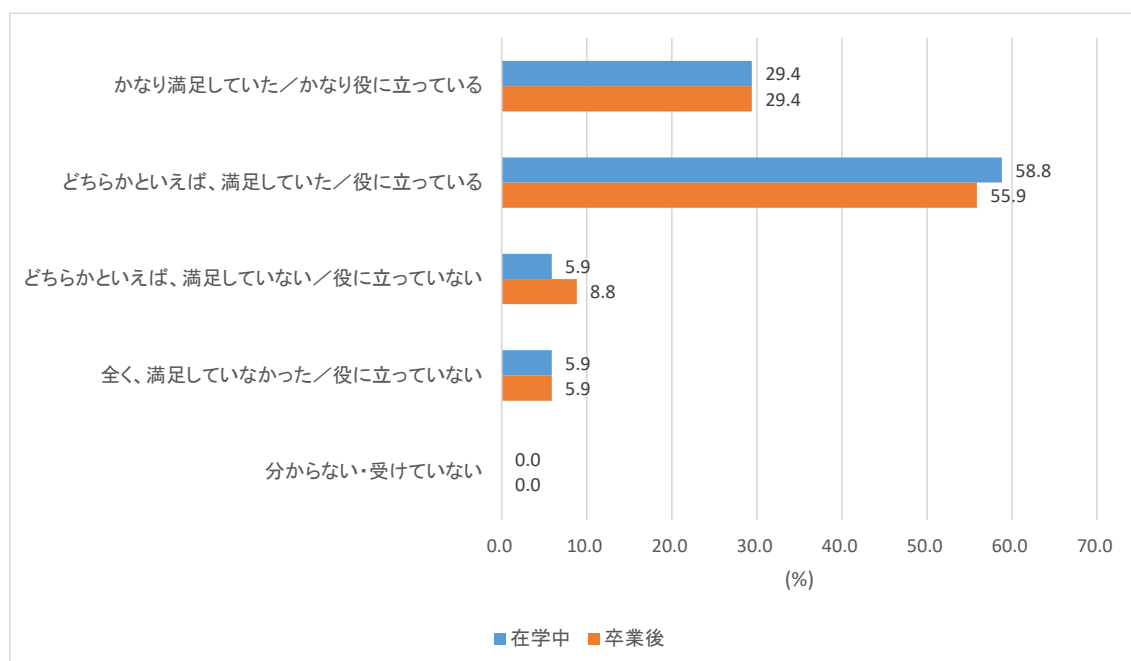


図 4. 自己発見とキャリア開発

この科目に対する満足度・有用性については、在学中と卒業後で評価に大きな差はみられない。「かなり満足していた／かなり役に立っている」（在学中 29.4%、卒業後 29.4%）と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」（在学中 58.8%、卒業後 55.9%）の合計は在学中および卒業後ともに 8 割を超えており、多くの卒業生が在学中および卒業後もこの科目を肯定的に評価していることがわかる。

一方で、約 1 割を超える卒業生が否定的な評価を行っていることより、引き続き今後のカリキュラムの改善等において検討すべき課題であるといえる。

問 7. 一般教養科目について

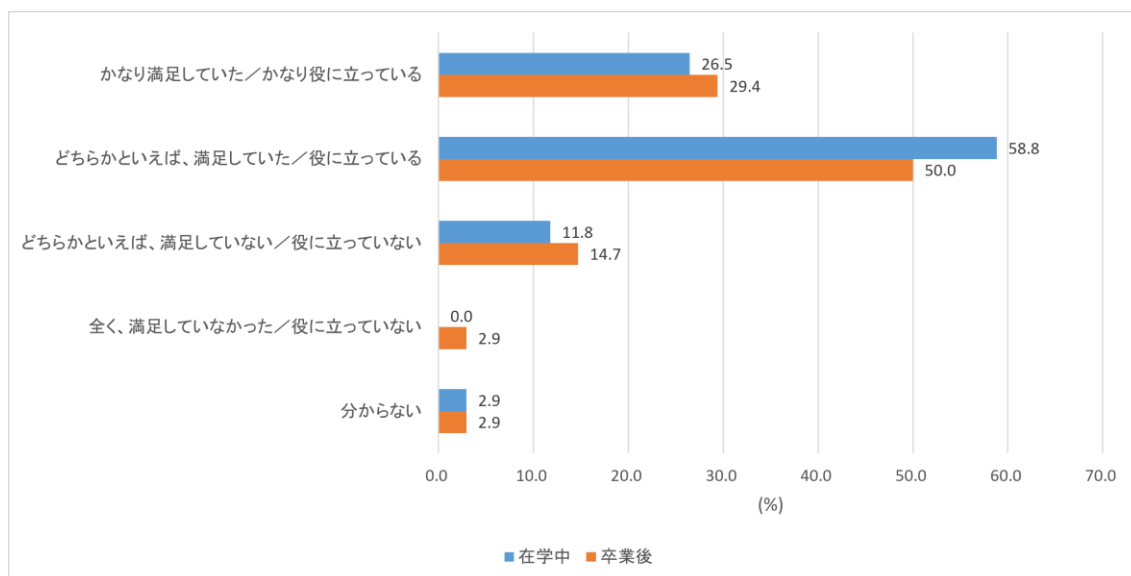


図 5. 一般教養科目

この科目については、「かなり満足していた／かなり役に立っている」（在学中 26.5%、卒業後 29.4%）と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」（在学中 58.8%、卒業後 50.0%）であり、これらの合計は在学中には 85.3%、卒業後では 79.4%であり、高い評価を獲得していることが分かる。一方、在学中では 11.8%、卒業後には 17.6%と 1 割を超える卒業生がこの科目について否定的な評価を行っている。

問 8. 外国語科目について

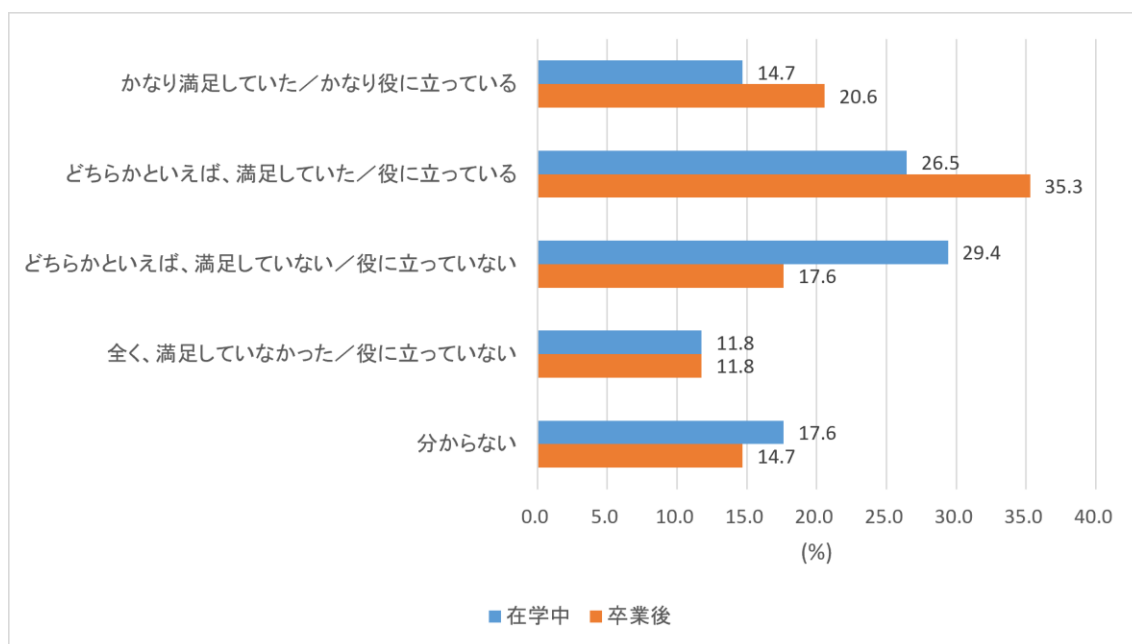


図 6. 外国語科目

この科目については、在学中と卒業後の評価に違いがみられる傾向にある。「かなり満足していた／かなり役に立っている」(在学中 14.7%、卒業後 20.6%) と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」(在学中 26.5%、卒業後 35.3%) の合計である肯定的な評価は、在学中には 41.2%から卒業後には 55.9%へと大きく上昇している。これに関連して、否定的な評価は在学中の 41.2%から卒業後の 29.4%へと減少している。

また、外国語科目については否定的な評価が比較的多くみられるほか、「分からない」と回答した卒業生も約 15%存在している。今日においても外国語能力の重要性は高く、これらの否定的な評価や理解・実感が十分でない層に対して、科目内容や教育効果がより実感できるように、さらなる見直しが必要であると考えられる。

問 9. 情報処理科目について

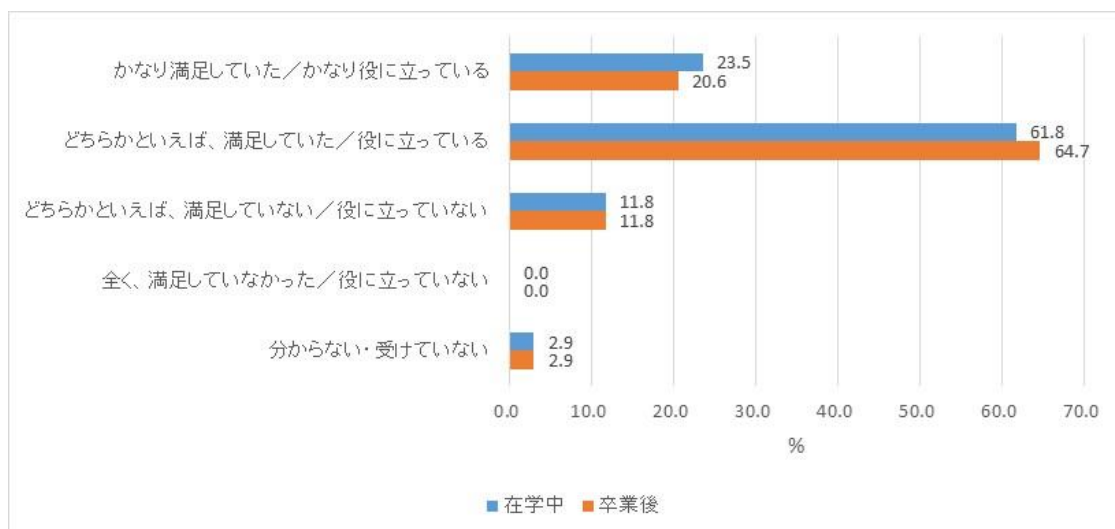


図 7. 情報処理科目

情報処理科目において最も注目すべき点は、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」と回答した割合が最も多く（在学中 61.8%、卒業後 64.7%）、卒業後に増加していることである。これは、社会に出てから情報処理スキルが実務で不可欠であることを在学生の時点で認識していた者が多く、卒業後にその重要性を再認識する卒業生が多いことを示唆している。現代社会におけるデジタル化の進展を踏まえれば、情報処理能力は業種を問わず基礎的なビジネススキルとなっており、この傾向は妥当なものといえる。

一方で、「かなり満足していた／かなり役に立っている」と回答した割合は、在学中の 23.5%から卒業後の 20.6%に微減している。このことは、情報処理科目の内容が一部の卒業生にとっては実務に十分結びつかなかった、あるいは自身のキャリアパスと必ずしも合致しなかったと感じられている可能性を示唆している。例えば、内容が基本的な PC 操作にとどまっていたことや、学生が求めるより専門的・応用的なスキルの習得には至らなかったといったケースが考えられる。また、実務において AI 関連スキルの必要性が高まっていることも、こうした評価に影響を与えた可能性がある。

問 10. 健康スポーツ関連科目について

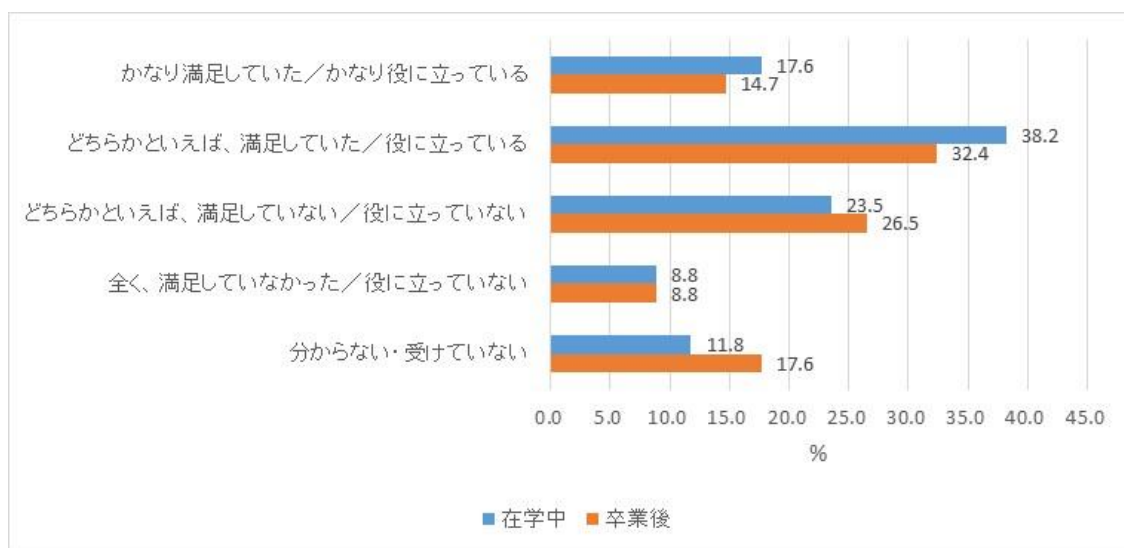


図 8. 健康スポーツ関連科目

健康スポーツ科目については、卒業後に満足度・有用性の評価が低下する傾向がみられる。「かなり満足していた／かなり役に立っている」(在学中 17.6%、卒業後 14.7%)と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」(在学中 38.2%、卒業後 32.4%)の合計は、在学中の 55.8%から卒業後の 47.1%へと減少している。特に「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の減少幅が大きく、卒業後には「必ずしも役立っているとは感じない」とする回答が増加していることがうかがえる。

一方で、否定的な評価(「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く満足していなかった／役に立っていない」の合計)は、在学中の 32.3%から卒業後の 35.3%に、「分からない」の回答も同様に 11.8%から 17.6%に増加している。

これらの結果は、多くの卒業生において、在学中に経験した身体活動や健康増進の機会が、卒業後の実生活やキャリアにおいて直接的に活用される場面が限られていることを示唆している。社会人になると運動習慣の維持が難しくなることや、健康に関する知識を実践する機会が制約されることなどが、このような評価の変化に影響している可能性がある。

問 11. キャリア科目について

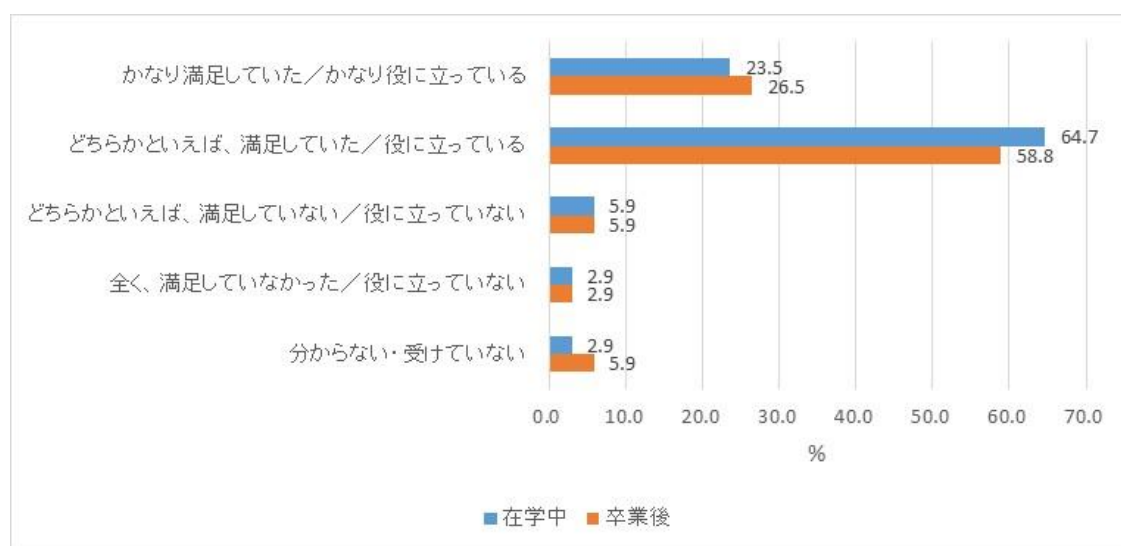


図 9. キャリア科目

キャリア科目に関して最も顕著なのは、「かなり満足していた／かなり役に立っている」（在学中 23.5%、卒業後 26.5%）の割合が、在学中に比べて卒業後において増加している点である。また、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」（在学中 64.7%、卒業後 58.8%）と合わせた合計は、在学中 88.2%、卒業後 85.3%といずれも高い水準を維持しており、圧倒的多数の卒業生がキャリア科目に対して肯定的な評価を示していることがわかる。これは、キャリア形成支援という科目の性質上、卒業後の実社会において有用な内容が多く含まれているためと考えられ、流通科学大学独自のキャリア科目の成果を示すものといえる。

一方で、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」と回答した割合は減少している。このことは、キャリア科目を一定程度評価しつつも、自身のキャリア形成に十分に活かすことの難しさを感じる卒業生がやや増加した可能性を示唆している。他方で、これは実社会においてキャリア形成の実践の難しさを経験的に理解した結果とも考えられる。

問 12. インターンシップについて

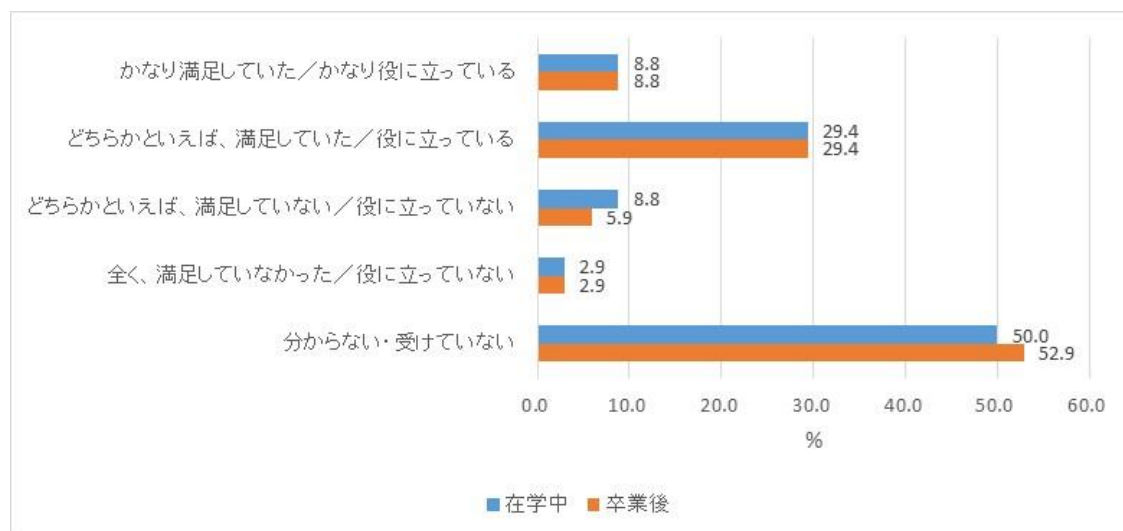


図 10. インターンシップ

「かなり満足していた／かなり役に立っている」（在学中 8.8%、卒業後 8.8%）と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」（在学中 29.4%、卒業後 29.4%）の合計は、在学中と卒業後の両時点において 38.2%と評価に変化はみられない。これは、インターンシップがキャリア形成において一定の役割を果たしていることを示唆している。

一方で、インターンシップは経験した学生においては概ね肯定的に評価されているものの、受講（参加）している学生が半数程度にとどまっている点が大きな課題である。

また、否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中の 11.7%から卒業後の 8.8%へと微減している。このことから、実際に社会に出た後には、インターンシップの経験を一定程度肯定的に再評価する傾向がある一方で、「より充実した内容であればよかった」といった改善余地を認識する可能性もうかがえる。

問 13. 学部専門科目について

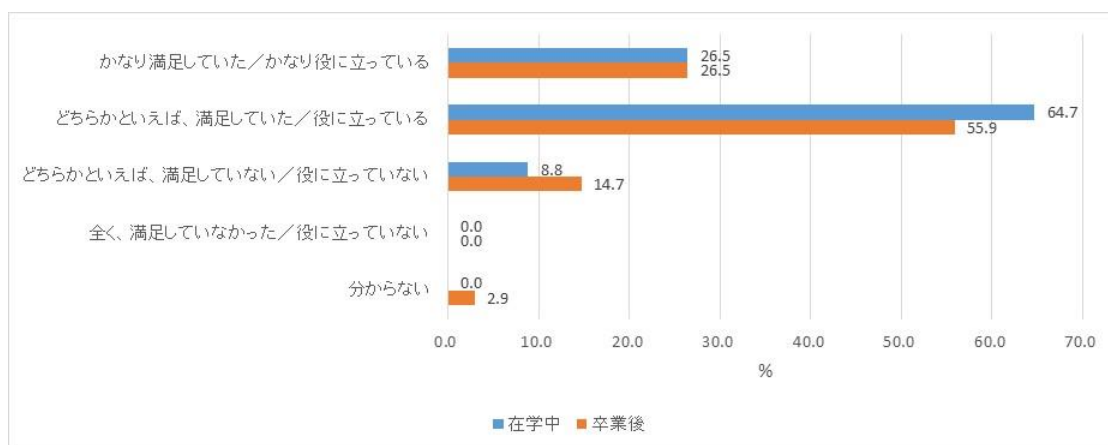


図 11. 学部専門科目

学部専門科目は、これまでに分析した他の科目と比較して最も高い肯定的評価を得ている。「かなり満足していた／かなり役に立っている」（在学中 26.5%、卒業後 26.5%）と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」（在学中 64.7%、卒業後 55.9%）の合計は、在学中 91.2%、卒業後 82.4%と、両時点において大多数を占めている。特に「かなり満足していた／かなり役に立っている」の割合は在学中と卒業後で変化がみられず、卒業後においても専門科目で習得した知識やスキルが実社会で有用であると認識されていることがうかがえる。これは、専門教育が学生のキャリア形成に直結し、社会で通用する専門性の育成に寄与していることを示す結果であり、教育内容が学生の期待に応え、実社会における応用性を有していることを示唆している。

一方で、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の割合は卒業後に減少しており、それに伴い否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中の 8.8%から卒業後の 14.7%へと増加している点も看過できない。これは、専門科目が多様な学生の関心や、変化する業界ニーズに必ずしも十分対応しきれていない可能性を示唆している。

問 14. 研究演習（ゼミ）について

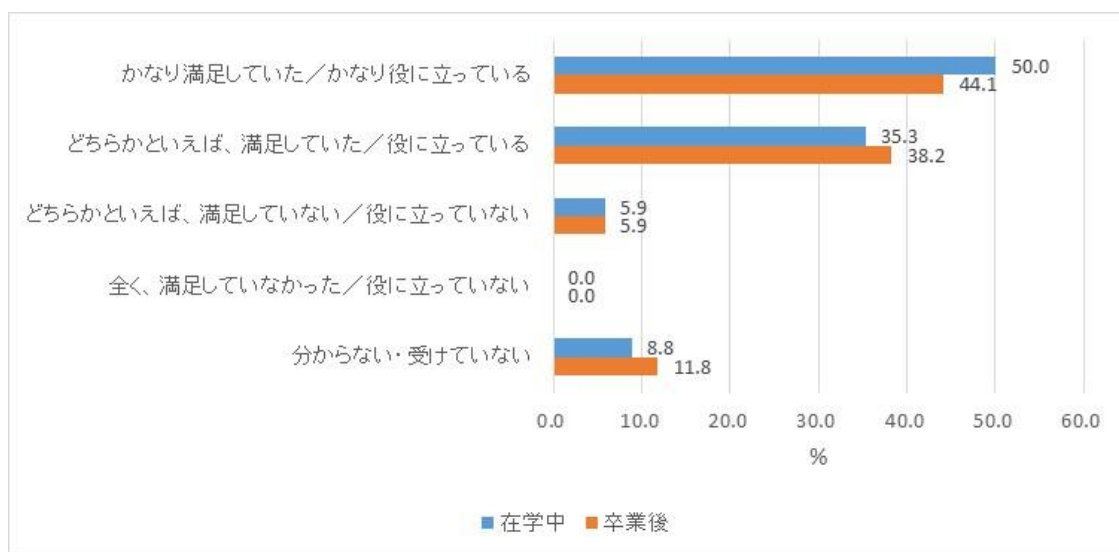


図 12. 研究演習（ゼミ）

研究演習（ゼミ）は、今回の調査項目の中でも非常に高い満足度と有用性の評価を得ている。特に「かなり満足していた／かなり役に立っている」（在学中 50.0%、卒業後 44.1%）の割合が最も高く、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」（在学中 35.3%、卒業後 38.2%）との合計は、在学中 85.3%、卒業後 82.3%と、両時点において大多数の卒業生がゼミを高く評価している。

一方で、「かなり満足していた／かなり役に立っている」と回答した割合は卒業後にやや減少している。このことは、ゼミで培った専門的な探究能力、プレゼンテーション能力、議論力、問題解決能力などが在学中のさまざまな活動において有用であると強く認識されていた一方で、卒業後の実務においてはその有用性が相対的に実感されにくくなっている可能性を示唆している。ただし、少人数制というゼミの特性上、教員や学生間の密接なコミュニケーションを通じて深い学びが得られる点は、卒業後における高い評価につながっていると考えられる。

また、否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中と卒業後のいずれの時点でも 5.9%と低い水準にとどまっており、他の科目と比較しても否定的評価が抑えられている。このことは、ゼミが学生のニーズや学習目標に比較的適合していることを示唆している。

問 15. 卒業論文について

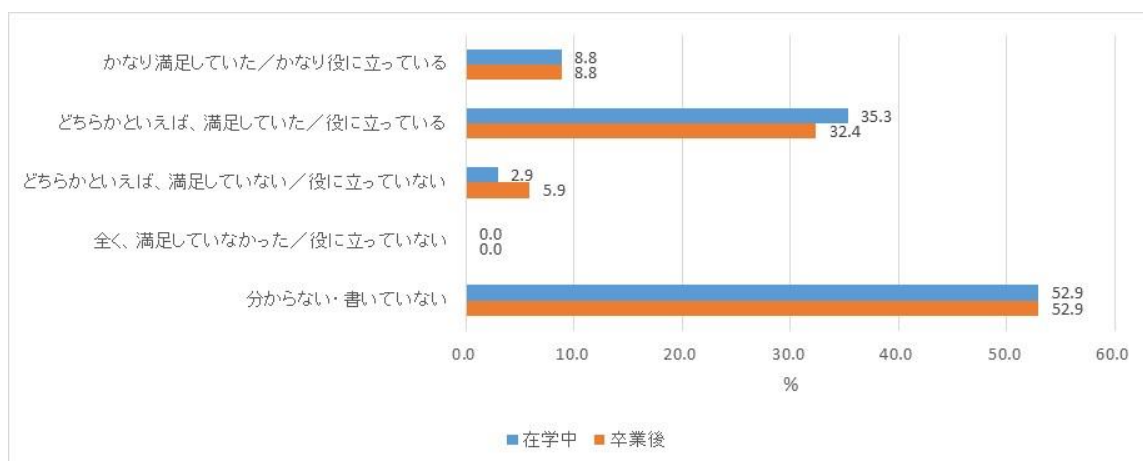


図 13. 卒業論文

まず注目すべきは、在学中、卒業後ともに約 5 割の卒業生が「分からない・書いていない」と回答している点である。これは、卒業論文が必修ではないため、多くの学生が履修していない実態を反映したものといえる。

全回答者ベースでは、「かなり満足していた／かなり役に立っている」（在学中 8.8%、卒業後 8.8%）と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」（在学中 35.3%、卒業後 32.4%）の合計は、在学中の 44.1%から卒業後の 41.2%へと微減している。「かなり満足していた／かなり役に立っている」の割合は在学中と卒業後で変化がみられない一方で、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の割合は卒業後に減少している。

これに伴い、否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中 2.9%から卒業後 5.9%へと増加している。

こうした傾向は、卒業論文に取り組んだ時点では達成感や一定の満足度が得られていたものの、卒業後の実社会においては、その内容やプロセスが実務に直接的に活用される機会が相対的に少ない、あるいは期待ほどの有用性を感じられていない可能性を示唆している。また、卒業論文への取り組み姿勢の差に加え、研究テーマの実用性、論文作成過程における指導の在り方、さらには修得したスキルと社会的ニーズとの間のギャップなども影響している可能性が考えられる。

4. 本学の教育やサービスについての改善点や後輩へのメッセージがあれば記入してください。

以下、「本学の教育方法、カリキュラム、授業の内容、教員の指導方法などの教育面」について自由記述で回答を求めた結果を見ていきたい。網羅的に提示することができないため、ユーザーローカル社のテキストマイニングツール

(<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いて自動要約したものを図 14～図 16 に示す。

問 16. 本学の教育方法、カリキュラム、授業の内容、教員の指導方法などの教育面について、良かったので継続して欲しい点や改善すべき点がありますか。具体的に記入してください。

本学の教育に関する意見として、以下の点が挙げられています。

1. 就職に関するカリキュラムの評価: 「就職に関するカリキュラムが非常に良かった。」という意見があり、就職支援に関する教育内容が高く評価されています。
2. 学外との交流の必要性: 中小規模私立大学の課題として、「学内で完結する活動が多く、他大学や外部社会との交流の機会が限られている点」が指摘されています。これにより、学生が社会での立ち位置を把握しにくくなり、就職活動への意識形成が遅れる可能性があるとしてされています。
3. 教育設計の提案: 学外との接点を増やすために、「他大学との合同授業や外部機関との連携など」が必要であると提案されています。
4. 講義内容の評価: 「自分の得意分野をもっと伸ばせたり苦手な分野を少しでも克服できたりする選択が幅広く、成長できる講義内容でした。」という意見があり、講義の多様性が評価されています。
5. 人間関係の構築: 「1 回生のクラス授業は、内容はあまり身になっていないが、様々な性格の人と関わるという点では、社会性が身についた。」という意見があり、社会性の向上が認識されています。また、特定の教員に対する感謝の意も表明されています。「担任の先生に、在学中から卒業後まで、親身になってくださり、今も支えられています。」という感謝の言葉が印象的です。

図 14 本学の教育面についての要約

本学の教育面についての自由記述からは、就職に関するカリキュラムや多様な講義を受講する機会に対して、初年次教育等を通じた人間関係の構築や社会性の育成についても評価が得られた。また、就職活動等への意識の醸成のためにも、学外との交流の機会を増やすべきであるという意見もあり、学生がより広い視野を養い、社会との接点を持つためのさらなる取組の拡充が求められている。

問 17. 本学の施設・設備面や、履修・生活・就職・健康などの相談や指導などのサービス面について、良かったので継続して欲しい点や改善すべき点がありますか。具体的に記入してください。

本学の施設、サービスに関する意見として、以下の点が挙げられています。

1. 施設費の負担: コロナ禍で施設が利用できない中、施設費を支払わなければならなかったことが辛かった。
2. 相談窓口の評価: 学内の相談窓口や就職支援は利用しやすいが、指導内容が抽象的で具体的な助言が不足していると感じている。特に面接対策や進路指導については、外部機関の方が実践的であると指摘。
3. 面接練習の評価: 面接練習に協力してくれたことに感謝している。
4. 安心感の提供: 分からないことがあれば個人的に聞ける機会があり、安心して過ごせたとの意見。
5. トイレの清潔さなど、施設面を評価する意見があった。
6. 一方で、就職支援については、ベンチャー企業に関する情報提供やサポートの充実を求める意見があった。

図 15 本学のサービス面についての要約

本学の施設・サービスに関する自由記述からは、学内の相談窓口や就職支援の利用しやすさ、面接練習などの支援環境に対して肯定的な評価がみられた。また、施設面ではトイレの清潔さを評価する意見も寄せられた。一方で、就職支援については、より具体的かつ実践的な助言を求める声や、ベンチャー企業へのサポート、情報に対する充実を求める意見もみられた。さらに、コロナ禍における施設利用と施設費負担のバランスに関する指摘もあった。

問 18. 最後に、卒業生として、流通科学大学で学んでいる後輩学生に対して、学生時代にやっておくべきことについてのメッセージがあれば、ご記入ください。

後輩に対するメッセージとして、以下のようにまとめられます。

1. コミュニケーションと楽しみ: 「人と人とのコミュニケーションを大事にし、学生生活を楽しみ、将来も楽しんでください。」後輩には、友人との交流を大切にし、学生生活を充実させることが重要であると伝えています。
2. 挑戦と好きなことの発見: 「嫌になったらすぐやめて良いので色々なことに挑戦すべき。自分の好きなことを増やそう。」多様な経験を通じて自分の興味を広げることが推奨されています。
3. 早めの就職活動: 「就職は早めに動いて頑張れば大丈夫。」就職活動は早めに始めることが成功の鍵であると強調されています。
4. 資格取得の重要性: 「資格取得。」資格を取得することが、就職活動や将来のキャリアにおいて有利に働くとされています。
5. 経験の重要性: 「勉学以外に、部活・サークルや大学内でのアルバイト(SA や TA など)の勉学以外に関する貴重な経験をしてみることで視野が広がり、新たな知識・考え方が身につくと思います。」学業以外の活動を通じて得られる経験が、成長に繋がると述べられています。 このように、後輩学生に対して多様な経験を通じて成長し、早めの就職活動や資格取得を意識することが重要であるとアドバイスしています。

図 16 後輩へのメッセージについての要約

後輩へのメッセージとしては、学生生活を楽しみながら人とのつながりを大切にするこ
と、多様なことに挑戦して自身の興味や可能性を広げることの重要性が強調されていた。ま
た、早い段階から就職活動や資格取得を意識することの必要性に加え、部活動やサークル活
動、学内アルバイトなど学業以外の経験を積むことで視野を広げ、成長につなげてほしいと
いう意見が多くみられた。

III. 卒業生アンケート（卒業後の既卒者アンケート）についての総括

2025 年度卒業生アンケートの結果から、本学での学びや学生生活に対する卒業生の評価、および社会に出てから実感した学修成果について把握することができた。卒業生から寄せられた多様な意見は、本学の教育活動が一定の成果を上げていることを示すとともに、教育内容や学生支援のさらなる充実に向けた課題と改善の方向性を示唆している。

卒業生の約 62%が民間企業で、18%が公務員として活躍しており、本学の実学重視の学びが多様な場面にて発揮されていることが分かる。

教育内容では、キャリア科目、専門科目と研究演習（ゼミ）が非常に高い評価を得ている。また、外国語科目については、卒業後にその有用性を実感する卒業生が多いことが確認される。一方で、健康スポーツ関連科目については卒業後に満足度が低下している様子がうかがえる。卒業論文やインターンシップについては、未履修者を含むため「分からない・書いていない／受けていない」とする回答が多い。今後は、履修者と未履修者を分けて分析し、これらの科目の教育効果と課題を明確にする必要がある。

施設・支援面に関する自由記述では、就職活動に対する手厚いサポートを評価する意見が見られた。また、トイレをはじめとする施設環境に関する肯定的な意見も寄せられており、学生生活を支える環境面について一定の評価が得られていることがうかがえる。とはいえ、2025 年度卒業生はコロナ禍に大学生活を送っており、施設利用に関する負担と便益とのバランスを指摘する声もあった。

卒業生は後輩に対して、コミュニケーション力の育成、多様な経験を通じた人間的成長、主体性・行動力の向上、キャリア形成への早期取組、資格取得や自己研鑽の推進、などを推奨している。

本アンケートの結果から、本学は実学を重視した教育を通じて、社会で活躍するために必要な知識や能力の育成に一定の成果を上げていることが確認された。また、卒業生からは就職支援に対する高い評価が寄せられるとともに、コミュニケーション力や主体性、多様な経験の重要性が指摘された。今後は、実社会とのつながりを意識した教育内容のさらなる充実に加え、学生一人ひとりが主体的に挑戦し成長できる学習環境やキャリア支援体制の強化を図ることで、より魅力ある大学づくりにつなげていくことが期待される。

本調査については、今後、回収率を上げるとともに、卒業時アンケート、在学生アンケート、新入生アンケート等とも連携の上、様々な側面からの分析を実施し、大学運営、教育改善について検討することが求められる。